[阪大ニューズレター]
社会と大学を結ぶ季刊情報誌

Handai NEWS Letter

SEASONAL MAGAZINE

Published by OSAKA UNIVERSITY

ぐっ!と阪大生

学生の素顔を課外活動から探る座談会 ― 1

現代GP・医学部保健学科 ―― 7
親と子の心を支援
地域と連携し専門職を育成する

産学連携・共同研究講座 ―― 9
キャンパス内に企業が研究室
共同研究講座すでに3件

2006年度文化勲章を受章 ―― 11
「学問は人類のために」
大阪大学名誉教授　荒田吉明

OB訪問 ―― 藤本佳之　•大阪厚生年金病院歯科口腔外科部長 ―― 13

健康 ―「今昔医食同源」
上島悦子 ――14

国際 ―「外国法との対話」
野村美明 ――15

阪大ニュース―― 大阪大学・大阪外国語大学
統合計画が承認　ほか ――16

大阪大学第３の海外拠点
バンコク教育研究センターで開所式 ――19

No.34
2006/Winter

発行日：平成18年12月1日
発　行：大阪大学
大阪府吹田市山田丘1-1
06-6877-5111
ホームページ：
http://www.osaka-u.ac.jp

◉特集

ぐっ！と阪大生

学生の素顔を課外活動から探る座談会

今年は大阪大学の学生による事件が相次いで報道されました。しかし一方で、ロボコンでの活躍や七大戦の総合優勝など、阪大生の周囲には明るい話題に事欠きません。「いかはん」（いかにも阪大生）とからかい交じりに呼ばれることもある阪大生の素顔はいったいどんなものなのか。課外活動で活躍する学生と学生生活を担当する教員・カウンセラーが語り合いました。

- 文化会運営委員長　経済学部経済・経営学科３年
  室崎浩介 —— *Kousuke Murozaki*
- 体育会委員長　文学部人文学科３年
  道上祥兵 —— *Shouhei Michiue*
- 大学祭中央実行委員会委員長　理学部化学科３年
  周防千明 —— *Chiaki Suou*
- 総長補佐・学生生活委員会委員長
  医学系研究科保健学専攻教授
  大和谷厚 —— *Atsushi Yamatodani*
- 学生相談室カウンセラー　保健センター助教授
  石金直美 —— *Naomi Ishikane*

▼阪大生も捨てたもんやない

大和谷　私が入学したときは大学紛争の真っただなかで、教員と学生がこんな形で話し合うなど考えられませんでした。学生生活委員会委員長・学生生活担当総長補佐として学生のみなさんといろいろ接して痛感するのは、「阪大の学生も捨てたもんやない」ということです。

石金　昨年８月に大阪大学の専任カウンセラーになりました。学生相談は４校目です。学生が何で悩むか、大学によってだいぶ異なります。相談室に来

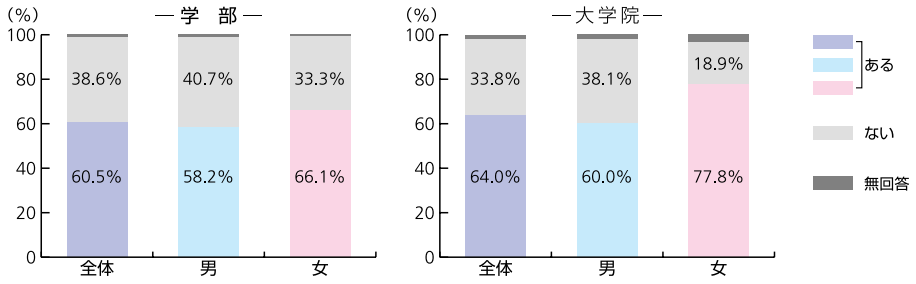
「あなたの意見が、阪大を変える！」

阪大生へのアンケート結果

「あなたの意見が、阪大を変える！」と題して、昨年11月から12月にかけて実施された第21回大阪大学学生生活調査。このほど、その結果が「大阪大学学生の意識と生活」として公表されました。ここでは今回の対談で話題になった事項の一部について紹介してみます。

1　「悩み」や「不安」について

（問）現在「悩み」や「不安」はありますか。



●全体として悩みや不安を感じている学生は極めて高率で、学部学生では全体の６割が何らかの悩みや不安を感じていることを示している。ただ、前回調査と比べると、学部学生は60.5%と前回の68%に比べ減少傾向がうかがえる。大学院生においても同様で、全体として悩みや不安を訴えている学生の割合は前回調査（71%）に比較して減少（64%）しているが、依然高い数値を示している。女性において悩みが多い傾向は、前回と同様であった。

「学生は管理対象ではない。大学の重要な構成メンバーだ」（大和谷）

る人はすごく真剣に生きていて、いろんなことを考えながら成長していくんだろうなと思っています。普段はあまり接点がないので、表舞台で活躍している学生さんの話が今日は楽しみです。

道上　体育会委員長の道上です。体育会本部は、各クラブから派遣された約30人で運営しています。ぼく自身は派遣でなく体育会専属です。

周防　大学祭を企画・運営する大学祭中央実行委員会は、委員会というよりサークルに近い感じ。サークルと同じように入りたい人が入ります。

室崎　文化系サークルをまとめる文化会は公認されてまだ数年。どう運営するか試行錯誤を重ねているところです。サークルを紹介するパンフレットの発行がいまは活動の柱になっています。運営委員は有力団体がそれぞれ出していて、ぼくは天文同好会の出身です。

▼学生は大学の重要メンバー

大和谷　大阪大学の学生は学部・大学院合わせて約2万人。25％が女性です。留学生は約1000人。子どもを持つ学生も障害のある学生も社会人学生もいます。多彩な学生に多様な支援をしたいと考えています。

大学は学生あっての組織です。「学生は管理対象ではない。大学の重要な構成メンバーだ」と私たちは考えています。大学は学生を信頼し、学生は最低限のルールを守る。そうして一緒にやっていく。そういう姿勢の一環として課外活動小委員会へあなたがた3人に入ってもらいました。大学組織の正式メンバーに学生がなったのは阪大で初めてのことです。

大学のキャッチフレーズを懸賞つきで募集したことがありました。学生の力を借りて大学を元気にしたいという趣旨です。1位になったのは「描いた未来を迎えに行く」というものでした。

▼対話で探る着地点

道上　学生から意見を出せる場、その意見が通る場の存在はすごく重要だと思います。スクールバスの増便も課外活動小委員会での要望がきっかけでした。

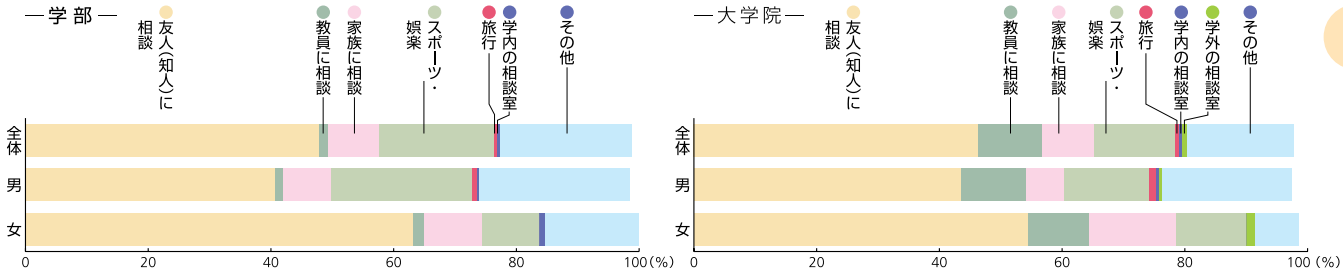
大和谷　大学に取り込まれてしまうと危惧する学生もいるのでは。

室崎　大学の看板を活用できるので、小委員会ポストの割り当てが文化会にあるのはうれしい。しかし、取り込まれるのを嫌い、大学から独立して自主的に活動したいという気風は文化系サークルに強くあります。文化会の設立が遅れたことにもそれはつながっています。

周防　普段から感じている不満をどこに言えばいいのかわからないし、言ってもどうせ無駄という思いが学生の側にあります。でも大学側と話す機会があれば、その不満がまっとうなものなのか単なるわがままなのか、前向きに考えることができます。

大和谷　大学祭の企画としてとてつも

（問）主にどのような方法で解消していますか。



●悩みや不安の解消法として、「友人に相談」に次いで男子は「スポーツ・娯楽」に向かう傾向は前回と同様である。女子学生では、友人に次いで家族が相談相手として挙げられている。いずれにしても、多くの学生は友人（知人）を最大の相談相手としている。学内の相談室を利用している割合は学部で0.5%、大学院で0.4%と低いが、前回調査で0%であったことを考慮すると学生相談室の認知度がそれなりに上がってきていることを示しているとも思われる。大学院生における悩み相談に教員が挙げられる割合が10%となっており、前回調査（10%）と比べてほぼ横ばいの数値を示している。「教員」は、男子大学院生では「友人」「スポーツ・娯楽」に次いで3番目で、「家族」よりも高い順位で相談相手として捉えられている。

周防千明さん

道上祥兵さん

室崎浩介さん

ない話を実行委員長が持ってきたことが以前ありました。頭からだめだというのではなく、一緒に話しながら着地点を探しました。大学と学生がコミュニケーションできるようになってきています。

石金　以前にいた大学は規模が小さかったので、不満を誰にぶつければいいか学生にも見えていました。端緒さえあれば対話は始まるはず。巨大組織の阪大でも、言える場があれば言おうという人が出てきます。

▼課外活動がもたらすもの

大和谷　非公認のサークルも含めれば学生のおよそ半数が課外活動をしている計算です。課外活動の面白さとは。

道上　今年、全国七大学総合体育大会（七大戦）で14年ぶり5回目の総合優勝を果たすことができました。七大戦は、北海道や九州など全国にちらばる旧七帝の国立大学とかかわる場。おたがいに目標としたり、親睦を深めたりという関係が卒業後も続きます。

大和谷　あと5センチ高く跳べればアテネオリンピックに出場できた走り高跳びの真鍋周平君（当時工学部4年）をはじめ体育会の活躍がこのところ目立ちます。

道上　リーグ昇格や国体出場など頑張っているクラブがいろいろあります。少林寺は去年、世界大会で優勝しました。一つでもそうした活躍があれば、全体に波及します。

大和谷　文化会系でもロボコンで優勝しました。

室崎　横だけでなく縦のつながりも強くなるのがクラブ活動のいいところ。天文同好会では、先輩の車で一緒に遠くまで彗星を撮影に行ったりもします。交響楽団なんかはOB会の活動がすごく盛んです。

大和谷　サイエンス系のクラブは研究熱心ですね。

室崎　驚くほど進学率が高くて、天文同好会の1年先輩は15人中14人が大学院へ進学します。

周防　どうしても大学は人間関係が希薄になります。自分から進んでかかわろうとしなかったら、人とのかかわりがなかなか持てません。その点サークルに入ると、いろんな学部の学生がいます。理学部の私にとって文学部の人の話がとても面白かったりします。一緒にいる時間も長くてサークル内が家族みたい。「この後輩もよく成長したもんだ」とか思ったりします。無理な企画を持ち込んでくるサークルもありますが、中央実行委員会としては、できるだけ対応して大学祭を盛り上げたい。

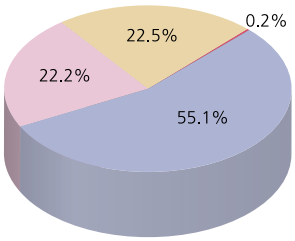
▼たまり場がもっとあれば

石金　学生相談に来る学生は、そういうところから少しずつこぼれ落ちたような人が多いようです。どこかにつながりがあれば、戻っていくときの手がかりになる。サークルでも何でも社会との接点を持っていれば、そこから力がわいてくる。大学全体も活性化します。

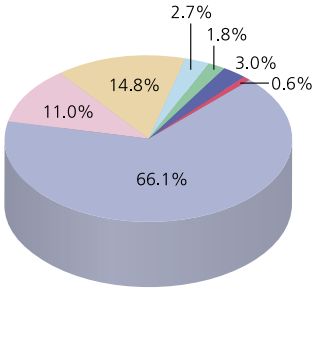
大和谷　地方から出てきたばかりでコミュニケーションの苦手な新人生はす

2 サークル活動について（学部生のみ）

（問）サークル活動をしていますか。



（問）サークルの種類は何ですか。



石金直美助教授

大和谷 厚教授

「学生が自発的に集えるスペース、そこを根城にして打って出られるようなたまり場がキャンパスのあちこちにあるといいですね」（石金）

「自分から進んでかかわろうとしなかったら、人とのかかわりがなかなか持てません」（周防）

ごく孤独になるようです。ボランティアやスポーツのサークルを装ったカルト系の団体がそこを狙ってくる。優しくしてくれて居心地がいいので、被害も出ています。大学としても毅然と対処していますが、健全なサークルがもっと育てばカルトの入り込む余地が減るでしょう。

石金　相談に来た学生が外に目を向け始めるとき、自分と同じような人と話したいと言いだします。そういうときに怪しい団体へ吸い込まれないで現実的なところに着地してほしい。学生が自発的に集えるスペース、そこを根城にして打って出られるようなたまり場がキャンパスのあちこちにあるといいですね。

道上　学生交流棟ができてからは、そのなかのレストランに集まっている人が結構いますが、たまり場がそれまではあまりなかった。

室崎　たまり場は重要です。文化会の所属団体が入っている明道館をサークルのメンバーはたまり場にしているけれど、どこにも所属していない人には居場所がありません。資格を取ろうとダブルスクールをしている友達が経済学部にいます。大学にはけっこう来ているみたいだけれど、孤独になっています。

大和谷　大阪外大と統合すると、キャンパスの人口が一挙にふえます。たまり場や出会いの場となるスペースをつくりたいと考えています。われわれの考えを押し付けても利用してもらえないので、学生の立場から意見を出してほしい。

▼卒業生との交流を通じて

室崎　就職した先輩を招いて話をしてもらう集まりをサークルが開いています。就職活動の時期がきたので、ぼく自身勉強になりました。

周防　中央実行委員会はサークルであると同時に委員会でもあるわけで、OBの助けがないと回らないようではだめなんです。先輩たちも、現役の意見を尊重して「できるかぎり頑張れ」というスタンスです。

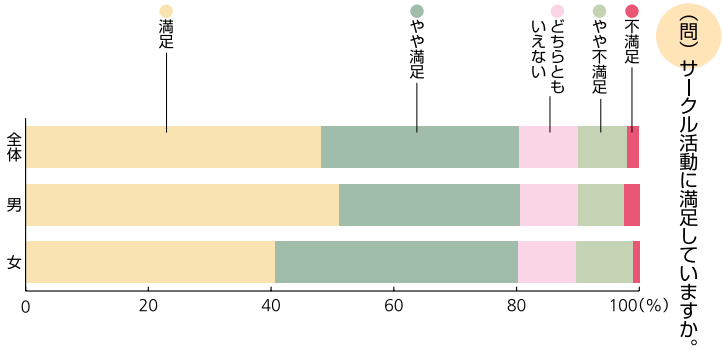
道上　体育会ではどのクラブもOB会があります。細かいことは言わないけれど、組織のまとめでも技術でも相談に乗ってくれて心強い存在です。

大和谷　OBを見れば自分の将来像が具体的に見えてきていいのでは。

石金　生き方のモデルになるうえに、立場の違う人とのコミュニケーションの練習にもなります。情報をもらうだけではなくて、卒業生との交流の中でコミュニケーションの力が伸びるのではないでしょうか。社会で役立つ力を培うことができます。

▼試合とテストがかち合うと

大和谷　京大は「単位は空から落ちてくる」、神戸大は「単位は下に落ちている」、阪大は「掘っても見つからない」。そんなふうに言うそうです。阪大は厳しくて、留年した学生が7・5%います。課外活動をしていて学業



●サークル活動に満足している者は、「やや満足」を含めると80.4%であり、前回の73.5%、前々回の70.6%から有意な伸びを示している。「不満足」でありながら加入を続けている者は、4.7%（前々回）→3.4%（前回）→2.1%（今回）と減少傾向にある。

●男女、文系理系を問わず、半数強の学生が現在サークルに加入している。「以前加入していた」を加えると4人に3人強（77.3%）の学生がサークル活動を行っている。全体でのサークル加入率（55.1%）は、平成9年調査51.7%、平成13年調査50.7%と漸減傾向にあったが、今回は平成6年調査の水準（54.8%）に回復した。

への影響はありませんか。

道上　試合日程が重なったとき授業を休んでも応援してくれる先生がほかの大学なら多いそうですが、阪大はあまり…。留年のかかった試験と日程がぶつかり、頑張って準備していた試合を捨てざるを得なかったという話を聞いたことがあります。

石金　公欠にはならないのですか。

道上　まずなりません。

大和谷　課外活動による公欠制度がないのです。天神さんの船渡御で阪大の船へ学生さんに乗ってもらおうとしたら、ちょうどテストとかち合ってしまった。そのときは、先生方に私から個別にお願いしました。

石金　留年して学業に戻ると、同級生から取り残されることになります。サークルなど居場所があれば、メンタルな面で留年しても戻りやすいでしょう。ただ、留年して何が悪いと個人的には思います。社会に出る準備をじっくりやる学生がいてもいい。

大和谷　大学側の人間としては留年生が増えるのは問題があるのではと見てしまいます。しかし、奨励するわけではないけれど、4年で出なければならないということもない。ただ、留年生のなかには悩みを持つ人もいるので、各学部でそういう学生を呼び出して面談する仕組みをつくり、きっちり対応できるようにやり始めました。

室崎　留学という選択肢もあります。

大和谷　奨励しています。多数の海外大学と交流協定を結んでいて単位互換や授業料免除が可能です。アメリカ・オランダ・タイに海外拠点も設けています。留学制度をぜひ利用して伸びてほしい。

▼一般学生も巻き込んで

大和谷　さて、法人化して3年になります。阪大はずいぶん変わってきました。

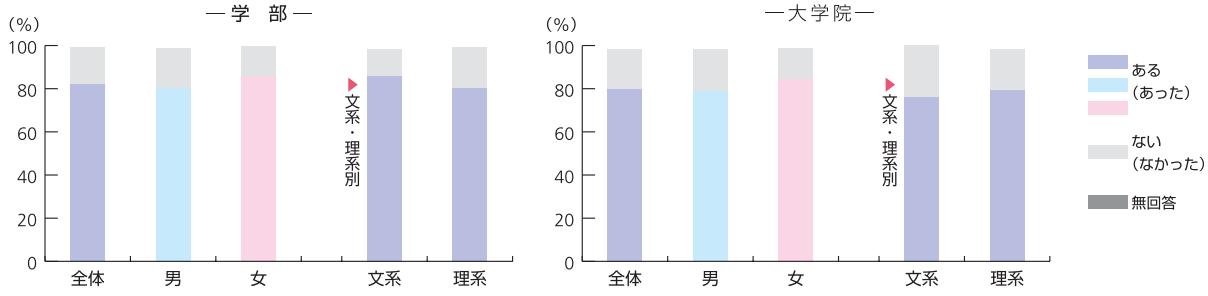
道上　まず外観が変わりました。豊中キャンパスから石橋駅への道がきれいになりました。課外活動小委員会に学生メンバーが入ったことも大きな変化です。

大和谷　大学祭も盛り上がってきた。

周防　阪大生はのりが悪くて。学祭なのに連休を利用して帰省したり旅行したり。

3　就職について

（問）就職に対する不安はありますか。（ありました）



●学部・大学院ともに就職に対する不安は極めて高い。就職状況が改善しつつあるといわれる中，なお企業の厳選採用の姿勢も根強く，また採用基準も透明性を欠くといった状況にもある。本学においても楽観を許さない現状を踏まえ，就活意識に乏しい学生に対する何らかの措置等を検討すべきであろう。

「クラス単位のつながりを高めることが帰属意識につながるのでは」（室崎）

「面白いことは周りにたくさん落ちていて、
それを拾えるかどうかが問題」（道上）

室崎　天文同好会でつくるプラネタリウムに一日中いるので、学祭のなかにいるのに他を知りません。今年こそ遊んでやろうと考えています。

大和谷　学生と一緒にいろんなことをやろうという姿勢が法人化の少し前から生まれていました。課題は、いわゆる一般学生をどうするか。引きこもっている学生もいるので、出てきて一緒にわいわいやろうよと言いたい。学生がキャンパスにいる時間をできるだけ伸ばしたいと思っています。

▼自分の大学が好きか

大和谷　いよいよ来年、大阪外大と統合します。近未来の大阪大学はどうなってほしいですか。

周防　自分の大学が好きだと学生が言うようになってほしい。今そういう認識は低いので。

大和谷　阪大生の帰属意識が低いのは、われわれと学生との距離が遠かったせいではないでしょうか。

室崎　クラス単位のつながりを高めることが帰属意識につながるのでは。クラスごとに模擬店を出すことがほかの大学ではよくあります。

周防　生物学科にはたまり場があります。そのためか学祭の企画を生物学科2回生が出しました。

室崎　経済学部だとクラスが集まるのは半年に1回。履修登録のときだけです。授業は大教室中心だし、どうしてもつながりが希薄になります。クラス単位の交流の場をとくに文系学部でつくってほしい。

大和谷　一緒に苦労した大学のクラスメートはすごく大事。いまだにいろいろ助けてくれます。

道上　新入生歓迎のドッジボール大会を体育会は毎年開いています。このごろ盛り上がってきて、参加登録が多くなりました。面白いことは周りにたくさん落ちていて、それを拾えるかどうかが問題。その手伝いをしてくれる友達がいれば楽しい4年間になります。

大和谷　ほかにも何かありますか。

道上　学祭のときに体育会はスポーツ大会を開催していますが、今年の春は、審判が少なくてソフトボールは見送りました。その反動もあって秋は、「自分たちで審判もやるから、頼むからソフトボールをやってくれ」と一般から要望が出ました。どこにも所属していない一般学生もパワーを秘めています。

▼「元気」を押し付けない

大和谷　近ごろの学生は元気がないと言うことも言われますが。

周防　「元気でないといけない」とか「夢を持たなければいけない」とか、そういう考えが主流になっているからよけいに生きにくくなっている。ないものはないし、いつも元気な人などいません。いつも元気でなきゃいけないというのはしんどいと思います。

むりやり切り捨てるのではなくただ待っていれば、そして元気がなくても受け入れられていれば、いつかまた元気は出てくるのではないでしょうか。

大和谷　そういう人を受け入れ、居場所を提供する大学でありたいと思っています。

▼多様な生き方を受け入れる

大和谷　「いかはん」（いかにも阪大生）と呼ばれる学生が多いとか。まじめで暗いとか、Tシャツのすそをズボンに入れているとか、そんなイメージで語られることがあります。建物も汚かった。ここで「いかはん」からイメージチェンジしたい。

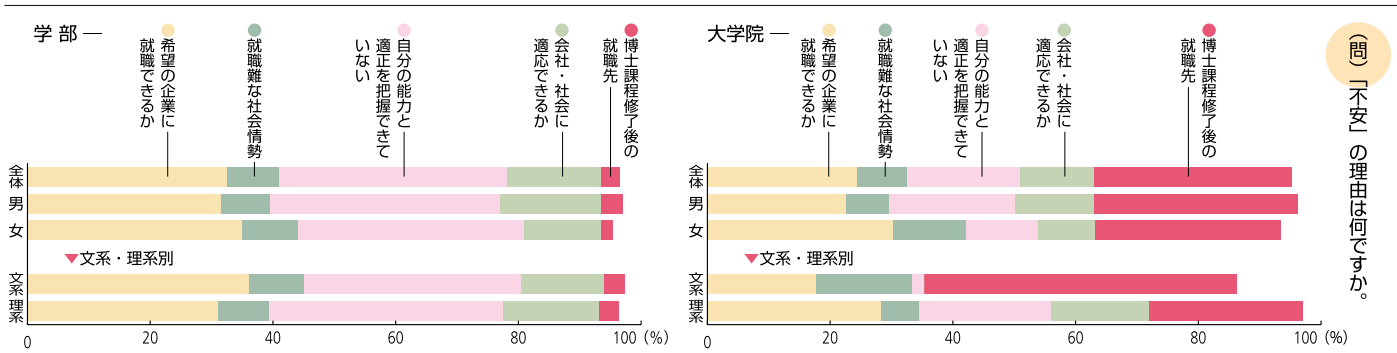
周防　男が多くて、しかも黒や茶色の服ばかり。省エネのために廊下の電気が半分消えている。

石金　わびしいですよね。雰囲気からつくられるものもあります。薄汚れたところだったら、きれいにしてもしょうがないと思ってしまいます。

周防　毎日実験があるので、ヒールもはけません。スカートも無理です。

石金　うす汚いところでごちゃごちゃやっているのも大学です。華やかな学生もすばらしいけれど、学生相談に来て人生のことを一生懸命考えている学生もすごく輝いています。

大和谷　それが今日の結論。多様な生き方を認めようというのが大学。そこから元気が出てくると思います。



●学部・大学院ともに就職に対する不安理由は明確である。一層のバックアップ体制を構築することが急務である。
各地の本学ＯＢの組織と連携するなど，大学全体としても積極的に取り組むべき課題は山積している。

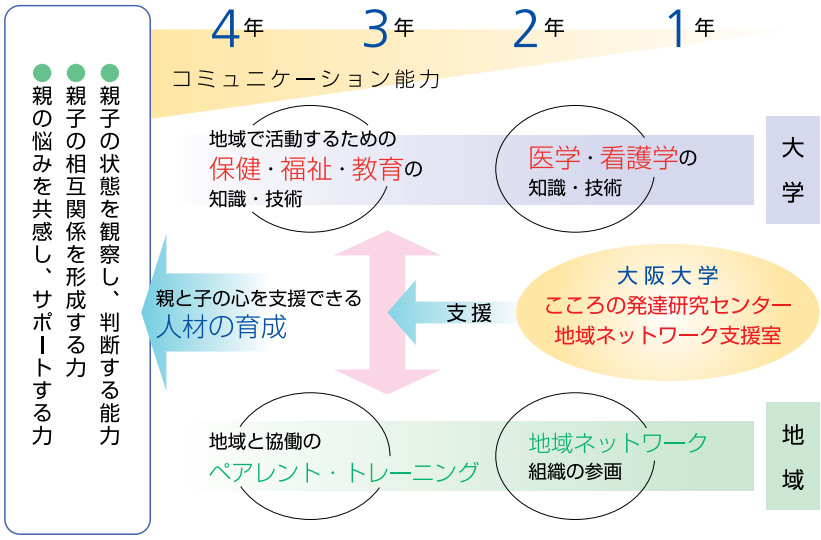
永井利三郎教授

親と子の心を支援

地域と連携し専門職を育成する教育プログラム

現代GP・医学部保健学科

親と子の心を支援できる人材の育成プログラムを医学部保健学科が新しく開発し、2006年秋に看護学専攻でスタートさせた。「ペアレント・トレーニング」などの実習を中心とする体験型の教育内容。発達障害の子どもやその親への支援を学ぶことで、さまざまな人の悩みに共感しサポートできる看護の専門職を育てる。虐待やいじめ・引きこもりの防止策として期待でき、社会的ニーズの大きい教育プログラムの開発をめざす「現代GP」として文部科学省に選定された。



■看護学専攻の必修プログラム

プログラムの名前は「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築――地域と連携した専門職育成プログラム」。永井利三郎教授や荒木田美香子教授を中心とする医学系研究科保健学専攻の教員グループが開発した。

保健学科看護学専攻の必修プログラム。正規カリキュラムの科目に組み込み、学部在学中の4年間で医学・看護学の知識を具体的に学ぶほかコミュニケーション能力や地域保健活動の力を磨く。障害のある子もいる保育所で実習したり、地域保健センターで開かれる育児教室や母親グループなどに加わったりする実地研修が中心。

なかでも重視している実習は、発達障害を持つ子どもとその親を対象としたペアレント・トレーニングの演習だ。

■発達障害を入り口にして

特定の学習が苦手な学習障害（LD）や落ち着きのない衝動・多動性障害（ADHD）など発達障害をもつ子どもはかなり多いことがわかってきた。文部科学省の調査によると約8％。ボーダーライン付近も含めるアメリカの調査では約20％にのぼる。

発達障害があると、「なまけている」と誤解されたり「へんな子」などといじめの対象になることがある。また学校だけでなく家庭でも「育てにくい子」と受け取られ、親子のつながりがうまくいかず、保護者などから虐待を受ける対象になることがある。

そうした環境のなかで失敗を繰り返すうち、「やっぱりだめだ」と本人は思ってしまい、「がんばろう」とする自信が育たない。しかし、周囲の者がそのサインに気づいて幼いうちから対応すれば、悪循環に陥らないで、障害とうまく付き合っていくことができる。

■セルフ・エスティームを養う練習

ペアレント・トレーニングは、発達障害の子どもとその親を対象にしたトレーニング。自分を信じて壁を乗り越

える力の源となるセルフ・エスティーム（自己肯定感）を養う。

トレーニングの基本は子どもをほめること。「ほめるところなんか見つからない」と思っても、「ちょっとした約束が守れた」など何か探し出してはほめる。悪いことをした場合は、よほどのことでないかぎり目をつむる。けがを招くような差し迫った危険があればその場でしっかり叱る。

いいところを探し出し、実際にほめる練習をするこうしたペアレント・トレーニングは、アメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で開発された。10回程度で一通り終える入門コースのほか、トレーナーを養成するコースなどが開発されている。

看護学専攻のプログラムでは、基礎を身につけた3回生の夏休みにペアレント・トレーニングの入門コースを実習する予定だ。

■地域ネットワークのなかで

プログラムは、地方自治体や民間団体の協力を得る。大学の地元・豊中市は、市内約20カ所の保育所を学生の実習先として提供する。

障害者や家族で組織する当事者団体や患者ボランティアとも連携。学生のコミュニケーション学習へ患者や家族に加わってもらい、実体験から浮かび上がった生活上の問題点などをともに考える。

プログラムの成否がかかるこうした地域との連携をコーディネートするのは「こころの地域ネットワーク支援室」。医学系研究科が2006年度に設置した「子どものこころの発達研究センター」の部門のひとつだ。市町村保健センターや支援組織と連携して専門職対象の実践セミナーや市民向け公開講座などを開いている。ネットワークを生かした交流によってそれぞれの活動がレベルアップすると期待される。

■いま求められるスキル

集団に溶け込みにくい発達障害児（者）は、早期に気づき、適切な対応がなされないと、いじめや不登校で子ども時代に苦しむばかりか、大人になっても職場になじめず、悩んでしまいやすい。画一的な教育になじみにくいため、一人ひとりに適した手助けが要る。兆候に気づくのが早いほど、社会性を養いやすい。

欧米諸国では、20年ほど前から発達障害に対する手厚いサポートが行われてきた。日本では、「発達障害者支援法」が2005年に施行されるなど目に見える形のサポートがようやく始まったところ。障害児教育の枠組みも変わり、特別支援の対象に発達障害を加えるよう学校教育法は改定された。「特別支援教育」と位置づけた新しい体制は2007年の完全実施を目標としている。

「医療・福祉・教育など関連する分野で支援を実際に行う専門家が求められています。ペアレント・トレーニングのできる保健師がいれば、現場ですぐに役立つはず」

教員グループをまとめる永井教授はプログラムの効用を説明する。

■広く活用できる教育モデルに

狙いは、即戦力の養成だけではない。「ペアレント・トレーニングで練習するスキルは、実は〝子育て〟の基本そのもの。発達障害をテーマとする学問はすなわち、人間の心の成り立ちを学ぶことです。病気の人をみるのも看護なら、病気にならないようにするのも、家族を亡くした人を支えるのも看護。親と子の心を支援できる力が身につけば、あらゆる健康状態の人とかかわる看護の専門職に必要な力量が飛躍的に向上するでしょう」

医療・保健にとどまらず教育・福祉など人の心と深いかかわりのある分野に広く応用が可能だ。

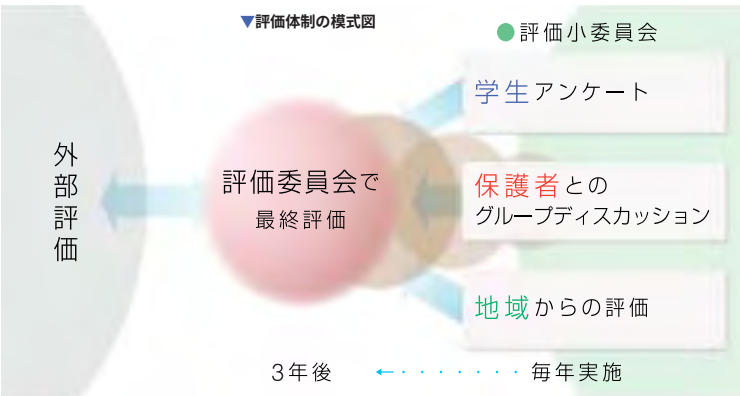
「現代GP制度による資金的援助は2年半で終わります。その後も大学独自でさらに継続・発展させてプログラムに磨きをかけます」

他の大学でも使える教育モデルとして確立させようと永井教授らはもくろんでいる。

	広報・啓発活動	教育プログラムの強化	評価
初年度	●シンポジウム１の実施	●学生学習用 e-learning 教材の作成	●評価小委員会による評価計画の決定
	●ホームページ 作成	●FD 活動として既存授業への導入事例を紹介・検討	●学生の知識・態度・能力に関する調査（ベースラインデータ）
第２年度	●シンポジウム２の実施	●ペアレント・トレーニング担当者講習会	●評価の実施（学生･地域ネットワーク組織）
	●ホームページ改訂	●学生学習用 e-learning 教材の見直し	
第３年度	●シンポジウム３の実施	●ペアレント・トレーニング担当者講習会	●総合評価の実施（学生・保護者・地域ネットワーク組織）
	●ホームページ改訂	●FD 活動の推進	●最終評価

▲各年次における教育プログラムの実施内容

▼評価体制の模式図



画期的なシステム誕生――

キャンパス内に企業が研究室

共同研究講座すでに3件

◉産学連携・共同研究講座

産学連携をさらに進める新しい制度が2006年春、大阪大学にできた。企業・大学それぞれから参加する研究者が学内に置いた研究拠点で一緒に研究する「共同研究講座」だ。三つの講座がすでにスタートした。

産学連携のコーディネーター役をつとめる馬場章夫・工学研究科教授

■社員で教授――

共同研究講座は、阪大の教員らと出資企業の研究者が同じテーマに共同で取り組む研究組織。研究費や人件費は企業側が出し、大学は学内にスペースを提供する。文部科学省が進める「スーパー産学官連携本部」のモデル事業の一つだ。

すでにスタートした3講座の場合、当面の契約期間は2～3年間。年3000万～5000万円を出資する。吹田キャンパス内にあるフロンティア研究棟1号館に研究室を持つほか、学内の実験装置を利用することができる。

各講座では企業から出向する研究者は教授・助教授や助手となり、大学側から参加する教員と対等の立場で研究を実施する。そのほか、ポスドク（博士研究員）・大学院生が参加するケースもある。研究で生まれた成果は大学・企業両方の共有財産となる。既設3講座はいずれも工学系の分野だが、医系など自然科学はもちろん人文・社会など全分野で設立が期待される。

■一気に進む産学連携――

産学連携の仕組みはこれまでにもあった。従来の共同研究は、特定の研究室に企業が資金を出して委託する形式。テーマも期間も限定的だ。大学全体で企業と提携する連携契約や、資金は企業が出し、テーマは大学が決める寄付講座という方式もある。いずれも、実際に研究を手がけるのは大学側のスタッフだ。

こうした従来型の連携と違い、共同研究講座では、第一線で活躍する企業の研究者がキャンパス内に腰をすえて大学の教員とともに研究に取り組む。緊密で長期的な連携が可能となり、普段は困難な基礎研究にじっくり取り組むことができる。独立した講座となるため、企業秘密の保護もしやすい。

大学側にとってもメリットは大きい。現実的な課題に直面する企業の優秀な研究者がキャンパスに常駐すれば、互いに切磋琢磨することで大学全体の研究レベルが上がる。学生は、インターンシップを学内で体験できることになる。

先端科学イノベーションセンター副センター長として産学連携のコーディネーター役をつとめる馬場章夫・工学研究科教授は次のように話す。

「これまでより密接な形で産学連携の選択肢が増えました。連携の中身は、講座によってフレキシブルに対応できます。企業からも学内からも反響は大きく、年度内にいくつか講座が増える見込みです」

Industry on Campus

大阪をフッ素化学のメッカに

足達健二教授（左）　毛利晴彦助教授（右）

フッ素の新素材・新用途をさぐる

◉ダイキン（フッ素化学）共同研究講座

ダイキン工業が出資して「ダイキン（フッ素化学）共同研究講座」はできた。社内研究所の一部をそのまま引っ越してきたようなスタイルで研究に臨む。

焦げ付き防止のフライパン塗装でなじみ深いフッ素化合物は、ほかにもさまざまな用途に使われている。液晶モニターや半導体の製造に欠かせないほか、医薬品の一部にも含まれる。電子を引きつける力が元素のなかで最も強いという性質が利用されている。

エアコンで知られるダイキンは、冷媒の主流を占めたフロンの原材料にもなるフッ素の研究を戦前から続けてきた。生産プロセスで危険の伴うフッ素化合物の生産や技術にかけては世界でも指折りだ。共同研究講座では、フッ素を含む新材料と新用途の開発をもくろむ。「大阪をフッ素化学のメッカに」と足達健二教授と毛利晴彦助教授。ダイキン社内での肩書は二人とも主任研究員だ。

「先端材料の研究が盛んな阪大にフッ素を持ち込んだら、新しいフッ素素材が生まれるのではないか。これまで、大学でのフッ素化学の研究例は比較的少なかったが、コラボレーションによって飛び抜けた成果が期待できます。エネルギー分野や人工臓器など用途についても可能性は広がっています」

有機材料の中では耐久性の極めて高いフッ素材料を分解処理する方法の研究も大学側のスタッフが進めている。リサイクルなど環境に配慮した技術の開発は企業のこれからにとって重点課題の一つだ。

建設機械のイノベーションを

竹田太四郎教授

環境性能上げて国際競争力

◉コマツ共同研究講座（建機等イノベーション講座）

建設機械メーカーのコマツは「コマツ共同研究講座（建機等イノベーション講座）」をつくった。ディーゼルエンジンの排ガスをもっときれいにするにはどうしたらいいのか。アームなどを動かす油圧装置のロスエネルギーを回収する手立てはないか。省エネ・省コストに結びつく溶接の手法をつくれないか。建設機械を革新する新技術の開発をめざす。

業界で世界2位のコマツは、国内需要の冷え込みをきっかけに建機の無人運転システムなど先端技術の開発に力を入れてきた。しかし国際競争は厳しくなる一方。価格は安く性能は高く、しかも環境にも良い画期的な製品の開発が大きな課題になっている

「社内の研究所でも躍起になっていますが、短期決戦の課題で手いっぱい。先を見通した基礎研究までなかなか手が回りません。機械や溶接など関連分野のレベルが高く以前からつながりも強かった阪大と手を結び、技術イノベーションに結びつく開発研究を進めます」

狙いを説明するのは、阪大・コマツ双方から集まった専従スタッフをまとめる竹田太四郎教授。神奈川県にあるコマツの研究本部から大嶋健司助手と阪大へ出向し、キャンパス内の研究室に常駐する。

「シーズとニーズをスタート時点からマッチングさせる仕組み。研究スタッフも専任ですから、タイムスケジュールもきちんと組めます。ニーズに敏感な人材の育成にも役立ちます。ここまで踏み込んだ連携は画期的。他大学も関心を寄せています」

マイクロ波化学研究の世界中心に

塚原保徳助教授（左）和田雄二教授（右）

化学合成の所要時間短縮めざし

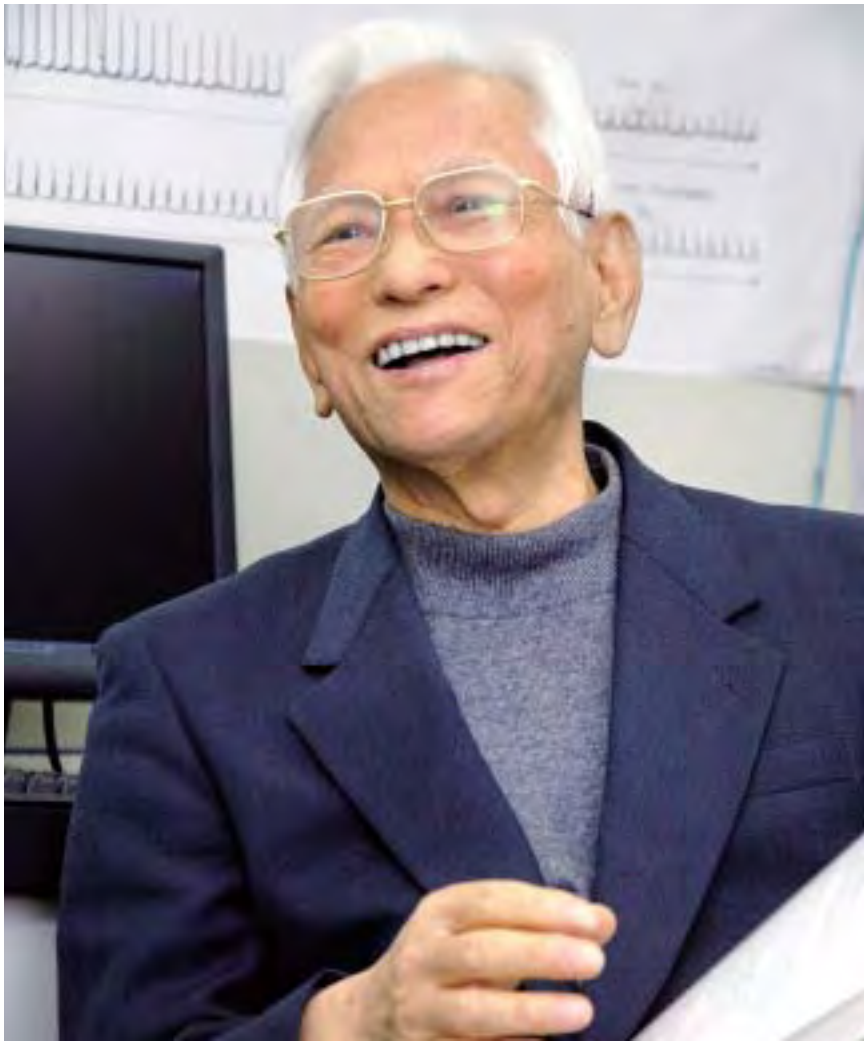
◉新日鐵化学・マイクロ波化学共同研究講座

電子レンジのエネルギー源として知られるマイクロ波をテーマにするのは「新日鐵化学・マイクロ波化学共同研究講座」。教授や助教授に就任した企業側の研究者が大学を訪れるのは月1～2回。実験室とオフィスを備えた一回り大きな研究室で普段実験を進めているのは大学側の教員・研究員だ。最近まで阪大のポスドクだった塚原保徳助教授が実験の現場リーダーを務める。

急速加熱をまんべんなくできるマイクロ波を当てると、金属のナノ粒子を一気につくることができる。ナノ粒子は、半導体の微細加工などに応用が見込まれる期待の材料だ。ただしマイクロ波がナノ粒子をつくるメカニズムは、10年ほど前に研究が始まっているにもかかわらず、はっきりとはわかっていない。共同講座の目標はまず、そのメカニズムを解明すること。そして、産業で使える大型のマイクロ波化学合成装置の開発に道をつけることだ。

講座のリーダーは岡山大の和田雄二教授。阪大の教授も兼ねていて、週1～2回は研究室を訪れ指揮をとる。

「技術が完成すれば、化学合成の所要時間を短くでき、製造プラントを一気に小型化できます。省エネにつながり、廃棄物を出さないグリーン・ケミストリーを進めることにもなります。化学工場が小さくなれば、巨大コンビナートで埋め尽くされた海辺も砂浜に戻せるでしょう」



学問は人類のために——

超高エネルギー密度熱源を開拓し ハイテク加工分野を創造

2006年度 文化勲章を受章

● 大阪大学 名誉教授 荒田吉明 —— *Yoshiaki Arata*

高温工学・溶接工学の権威として知られる荒田吉明・本学名誉教授が2006年度の文化勲章を受章した。本学では歴代17人目。工学系では初の受章となった。退官後のライフワークは常温核融合の研究。82歳の今も「人類のためになりたい」と研究活動に情熱を注ぐ。

◆学部2年でパテント

——初期の研究の様子は？

サイエンスとテクノロジーの重要性を敗戦のときに痛感し、世界に負けない実験をしようと心に決めた。幸いにも、大学院に入学の折、学生なのに講師レベルの給料のある特別研究生にしてもらうことができ、軍の放出品を大阪の日本橋で買ってきては機械をつくったものだ。メーカーの工場にも助けてもらい、電子顕微鏡もつくった。

超高温プラズマ核融合の公開実験をしたのは1958年だった。戦争の焼け跡がまだ残っていて、旧陸軍の建物を転用した枚方の機械工場に寝泊まりしながら装置をつくった。ドラム缶に電熱器をほうりこんで風呂がわりにした。実験室の前にテントを張って成功の瞬間を狙う新聞記者もいた。

——最初の研究は？

溶接棒に塗るフラックス（補助材）の厚さが均一かどうか電磁気を応用して測るための仕組みを考案した。学部2年の夏休みのことで、ぼくにとって第1号のパテントだ。

◆学際的分野でスタート

——学生時代を振り返ると？

今から思えば、溶接工学という分野

● プロフィル：1924年、京都府生まれ。49年、大阪帝国大学工学部溶接工学科卒業。大阪大学工学部助教授、教授を経て大阪大学溶接工学研究所教授に。退官するまで10年間は同研究所所長。超高エネルギー密度熱源センターや大学院高温工学専攻を設立。88年、退官と同時に「大阪大学荒田記念館」が設立される。米国レーザー学会最高賞「アーサー・シャーロウ賞」など受賞多数。文化功労者・日本学士院会員。

11月3日　皇居にて〔毎日新聞社提供〕

**発想を生み出す直感と
その元になる学際的な基盤とがなければ、
今のぼくはないだろう**

に入ったのがよかった。電気・造船・化学などいろんな分野にもまたがる学際的な学問だったからだ。

雨の日に溶接すると2～3日後に溶接部分が割れてしまう「遅れ破壊」という現象についてあるとき授業で聞いた。水素イオンが悪さをして、数万気圧の圧力を金属の中で生み出すのが原因という話だった。「その原理を使えば高圧を発生させる手段になりますね」と言ったら、「荒田君、たいしたもんだね」と岡田實先生（工学部長、第8代総長）は言ってくださった。

頭に残っていたそのことが10年ほど後になって役に立った。そのころ核融合の研究を始めていたものの、実験に必要な重水素がどうしても手に入らない。それなら自分でつくってやろうと思ったときにハッとひらめいたのが遅れ破壊現象の原理だった。さっそく応用してみたら重水素がどんどんできた。

岡田先生の講義を聴いていなかったら、出てこなかったアイデアだろう。学生のころ、溶接工学科の講義だけでは不足で、電気やら力学やら他専攻の先生にしょっちゅう議論をふっかけていた。

◆直感と基盤が原動力

――研究を前進させる原動力は？

直感だね。たとえば風呂に入っているとき、こんなことを考えた。自分の体を電極だと仮定したらどうなるだろう。電解液に相当する風呂のお湯を体から離した場面を想像すると、そこには熱いガスが残ることになる。「ははあ、これはサウナやな」と直感した。内部を満たす電解液の代わりに高温ガスを使えば新しい反応炉ができるではないか。「ホットバスからサウナへ」と国際会議でも説明した新方式のアイデアは風呂場での直感が生み出したものだった。

発想を生み出す直感とその元になる学際的な基盤とがなければ、今のぼくはないだろう。

電子ビームやレーザーやプラズマを熱源にする超高密度エネルギーの技法もぼくがつくり、その技術を「ハイテク加工」と名づけた。いまでは産業界で広く使われるようになったが、アイデアの芽となったのは学部3年のときの研究体験だ。当時、厚板材の深部まで溶接できる技法の原理を解明して学会で発表した。細く集中させた溶接アークの威力をその研究で知り、エネルギーをビームにして強力な熱源とするアイデアがやがて生まれた。

◆夢は常温核融合の実用化

――研究者にメッセージを。

人類のために学問はある。とくに工学分野の研究者は、新分野を開拓し新産業をつくるほどの気概をもって臨む必要がある。ハイテク加工の技術や高温工学・プラズマ工学の学問分野を開拓して大きな貢献をしてきた自負が私にはある。これからも、人類のためにさらに大きな貢献をしたい。

――文化勲章を受章した感想は？

非常にありがたい。今後の研究の励みになる。定年退官して18年。テーマを絞って研究してきた常温核融合の研究に弾みをつけたい。今は研究費も人材もないので、これを契機として研究拠点ができるといい。「新エネルギー創生研究所」といった名前でどうだろう。

常温核融合の技術が実現すれば、公害の危険なしにエネルギー危機は解決する。実現不可能な夢物語という人もいるが、高温超伝導も初めはそう言われた。

▶ 半世紀前に核融合の公開実験 ―― めざましい研究業績を荒田名誉教授は積み上げてきた。主なものは次のとおり。

超高温プラズマ核融合の公開実験

大電流パルス放電技術を開発し、当時世界最高の瞬間300万アンペアの放電を得ることに成功。1958年、超高温プラズマ核融合の公開実験に日本で初めて成功した。1億度もの高温を必要とする超高温プラズマ核融合と並行して、常温での核融合をめざす固体内核融合の実験にもこのとき着手した。

超高エネルギー密度熱源の開発

レーザー・電子ビーム・プラズマビームを活用する超高エネルギー密度熱源をそれぞれ開発。分厚い鋼材から微細な集積回路まで幅広い分野に及ぶ加工技術を飛躍的に高めた。

米国金属学会（ASM）は1986年、550編に及ぶ荒田教授の研究論文の中から57編を選んで約600ページの単行本として出版した。個人の論文集を同学会が出版するのは異例という。

また国際溶接学会（IIW）は、学会最高賞に「IIW YOSHIAKI ARATA AWARD」と荒田名誉教授の名を冠している。

「個々に応じたベストの歯科医療を心がけ」

◉OB訪問

・大阪厚生年金病院歯科口腔外科部長――藤本佳之――Yoshiyuki Fujimoto

●藤本佳之（ふじもと　よしゆき）氏
1959年、大阪市生まれ。85年、大阪大学歯学部卒業、歯科医師免許取得。
同年、大阪大学歯学部第一口腔外科入局。
93年、口腔生理学の分野で大阪大学博士（歯学）学位取得。
八尾徳洲会総合病院歯科口腔外科部長を経て2002年より現職。
日本口腔外科学会指導医。神戸市内に妻、小6、小2の息子と暮らす。

歯科治療の分野で普及が進む「第二の永久歯」、インプラント。その専門知識の習得、技術の向上を図り、学会認定医を養成する場でもある「大阪口腔インプラント研修センター」が、大阪厚生年金病院（大阪市福島区）内にある。歯科口腔外科部長、藤本佳之さんは、そこの、いわば世話人。「患者さんとのコミュニケーション」を大切にする日々の丁寧な診療の傍ら、センターの運営や後進の指導にも意欲的に取り組んでいる。

インプラントの治療は長く手がけていらっしゃるのですか？「02年に大阪厚生年金病院に赴任した時からです。前部長が20年間、インプラント治療をしてこられ、それを受け継ぐ形で私も治療と研修センターのお世話をさせていただいています。歯科インプラントは、抜けてしまった歯の代用として使用する人工歯根のことで、素材にはチタンが多く使われます。今はまだまだ高額ですが、今後、普及していくでしょう。私自身はここでインプラントを始めてまだ5年目ですので、センターで行う歯科医向けの研修では、主に口腔外科のテクニックを教えています。将来はインプラントを教えられるようになりたいと思います」

歯科医を志したのは？「甲陽学院高校時代の同級生の家が歯科医院を開業していて、影響を受けたのがきっかけです。手先が器用だということもあり、向いているかな、と。一浪して阪大の歯学部へ入り、大学と同じ福島区内の実家から自転車で大学へ通う、ごくまじめな学生でした。成績は、真ん中より下はいやだけど、トップを目指すタイプでもない。5年の時（1983年）、歯学部が吹田へ移転。学士入学の制度も始まり、違ったタイプの学生が入ってきて、新鮮さを感じたことが印象に残っています」

勉強以外では？「歯学部の学生だけのバスケットボール部に入っていました。背が高いこともあって、ポジションはセンター。教養課程2年のころ、オール・デンタルの全国大会で準優勝したのは楽しい思い出。バスケットは今もたまに病院内のチームでやっています。阪大歯学部の現役チームは、今年の大会で、国立大初の優勝という快挙を遂げましたよ」

歯科の中でも口腔外科を専門とされた理由は？「バスケットボール部の先輩が何人か口腔外科にいたからで。こうして振り返ってみると、ぼくはなんか場当たり的ですね。ただ、転機だったかもしれない時期という点で、口腔生理学教室の山本隆助教授（現在は人間科学研究科教授）のもとで研究させていただいた後、臨床ではなく研究の道もあると考えたことがあります。結局、患者さんとじかに接する方が自分には合っているだろうと、臨床を選びました」

仕事の上で大切にしていることは？「患者さんの立場になり、均一ではなく個々に応じたベストな医療を心がけています。とはいえ、自分のレベルが低いので対応しきれなかったり、近視眼的に口の中に集中しがちだったり。常に何が一番望ましいのか考え対応していきたいですね。入院患者さんの症状により病院に泊まり込むこともありますが、基本的には仕事が終われば家に帰って家族とすごします。病院が休みの日も、研修の用事や勉強で出かけることが多く、家族とどこかへ遠出することは少ないですが、小学生の息子たちと遊び、家内と話していれば幸せですし、家庭はオアシスだと感じています」

阪大をどうご覧に？「阪大は好きだし、仕事でも阪大つながりでお世話になっている部分は多いです。現に本病院も阪大系で、院長の改革によって働きやすい環境なんです。今の学生に望むこととしては、自分は何をしてもらえるか、より、何をさせていただけるか、社会にどう還元できるか、と早いうちから考えてほしい。ぼく自身は、一生懸命働くことが人のためになっていると思っていましたが、昨年、大阪リバーサイドロータリークラブに入会したことが契機で、自分の仕事をこなすだけでは不十分だと考え始めています。職業を通して、地域で、社会でどんな奉仕ができるか、これからの課題です。

HEALTH

■健康

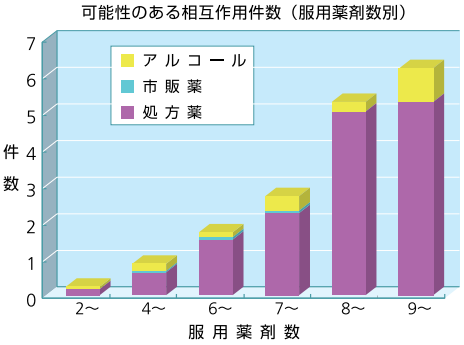
「今昔医食同源」

大阪大学大学院薬学研究科附属
実践薬学教育研究センター
病院薬学教育研究部　教授
上島悦子 ――― Ujijima Etsuko
E-mail : uejietsk@phs.osaka-u.ac.jp

■薬の服用と健康

今日、健康志向はかつてない広がりを見せています。とりわけ、食に対しては、身体のみならず、心の健康との関係にも注目が集まっています。健康づくりの基本は『規則正しい、バランスのとれた食事と生活習慣』です。しかしながら、食事だけでは不足する栄養素を簡単に便利に補う目的で、健康食品が多用されています。2001年の国立健康・栄養研究所が行った調査によると、男性の38・5%、女性の42・3%が利用されていました。

大阪大学医学部附属病院薬剤部では、1991年より、入院中の患者さんに対して、服薬相談などの業務を開始しました。15年前の業務開始当初より、入院して来られたその日に、患者さんと直接面談し、服用中のお薬はもちろん利用されている健康食品なども確認してきました。当時は、現在のように薬の説明書やお薬手帳が患者さんに手渡されておらず、多科受診に伴う同種薬の重複や薬物相互作用などによる副作用を、入院時に発見することも決して少なくありませんでした。入院は、患者さんの病態に影響を与えている服用の全容を知り、問題が起こっていないかを確認できる貴重な機会です。そこで、入院患者さんの服用中の薬物、健康食品などについて、相互作用などが実際にどの程度生じているかを調査しました。その結果、図に示す通り、服用薬剤数が増加する程、相互作用の可能性が増大しました。また、処方薬のみならずアルコールとの相互作用も多く起こっていることがわかりました。この例にも見られるように、薬と飲食物との相互作用は意外に多いのです。



▲横軸に、服用中の薬剤数、縦軸に起こり得る相互作用の件数を、他院での処方薬（赤色）、市販薬（青色）、アルコール（黄色）の別に示しています。服用薬剤数が多いほど、相互作用は起こりやすくなります。

■飲食物との相互作用

そこで、薬と飲食物との相互作用の例をあげますと、薬はいつ飲めばよいかを考える際に、食事の影響を第一に考えます。前述のアルコールは急性には薬物の代謝を阻害し、慢性の飲酒は薬物の代謝を促進します。アルコールは多くの薬物の中枢鎮静作用を増強します。次にグレープフルーツジュースは、カルシウム拮抗薬、高脂血症治療薬、免疫抑制薬など多くの薬物の代謝を阻害し、その作用を増強します。抗凝血薬のワルファリンは納豆菌が合成するビタミンKで作用が減弱するため、併用が禁じられています。また、ブロッコリーやホウレン草などの緑色野菜には、ビタミンKが多く含有されているため、一度に大量摂取しないようにする必要があります。このように飲食物と薬の飲み合わせは枚挙に暇がないほどです。中にはワルファリンのように飲み合わせにより効果が増強することにより、脳出血などの危険な副作用を起こすことさえあります。

ますます盛り上がりを見せる健康志向を受けて、健康食品と呼ばれるものと薬との間に思いがけない相互作用が生じる可能性があります。新薬についてはその開発の途上で、薬物相互作用が生じる危険性についての検証が行われており、市販後も相互作用についての情報が添付文書に追記されています。しかしながら、いわゆる健康食品については、通常、その検証は行われていません。従って、医薬品を服用している患者さんが、新たに健康食品やサプリメントなどを摂取しようと思う際には、ぜひ前もって医師または薬剤師に相談されることをおすすめします。

■補完代替医療の世界的な高まり

当医学部附属病院には本年全国に先駆けて補完医療外来が開設され、補完代替医療（CAM：Complementary and Alternative Medicine）に関するご相談を受け付けています。日本補完代替医療学会では、代替医学・医療を『現代西洋医学領域において、科学的未検証および臨床未応用の医学・医療体系の総称』と定義しています。補完代替医療には機能性食品、健康食品、ハーブ、鍼灸、アロマテラピーなども包含されます。従来これらのほとんどが根拠の乏しいまま使用されていました。アメリカにおいては、NIH（米国国立衛生研究所）内において世界的な最先端医学研究施設の一つとしてOAM（代替医療事務局）が設立されました。今や補完代替医療は世界的に新しい医学の潮流となりつつあります。作用機序や有効性が科学的に明らかにされたものが増加しつつあり、科学的な根拠（エビデンス）を明らかにしていこうとする動きが高まっています。

INTERNATIONAL

■国際

「外国法との対話」

国際公共政策研究科・高等司法研究科併任教授
野村美明 ―― Yoshiaki Nomura
E-mail : nomura@osipp.osaka-u.ac.jp

■海外インターネット取引と消費者

山田さんがインターネットで外国のG国の事業者から商品を購入すると、今までは日本の法律による保護を受けることが難しかった。なぜなら、画面上には、契約はG国の法律に従うという条項（図の10.Governing Law/Venue以下）があり、山田さんは「同意します」をクリックして（図参照）しまったからだ。ところが、2006年6月に成立した「法の適用に関する通則法」（平成18年6月21日法律78号）によれば、外国法に従うと合意した契約でも、日本法による保護を受けることができる。

通則法11条は、消費者が常に居住する国（常居所地）の法律の適用を求めれば、裁判所はその法を適用しなければならないと定める。これによって、山田さんは、日本の裁判所で、消費者契約法による保護を求めることもできる。これに対して、事実が逆で、もし外国の消費者が日本の業者を日本で訴えれば、消費者の常居所地法である外国法が適用される可能性がある。

このように、国際的なケースを日本法か外国法のいずれで判断するのかを決める法律が「国際私法」である。通則法は、日本の国際私法として100年以上の歴史を持つ「法例」（明治31年法律第10号）を全面改正し、2007年の1月1日から実施される。

■海外旅行と事故の法

カナダのスキー場で日本人スキーヤー同士が追突し、被害者Xさんが日本の裁判所で加害者Yさんに損害賠償を求めるという事件があった。Xさんの訴えは、不法行為地であるカナダの法で裁判するのが原則である。しかし、通則法では、XさんとYさんの常居所が日本にあることなどから、例外的に日本法が適用できる（20条）。また、XさんとYさんは裁判所で日本法の適用に合意することもできる（21条）。

しかし、Yさんがカナダに居住するCさんにけがをさせたとしたらこうはいかない。CさんがYさんに日本の裁判所で損害賠償を求めたら、日本法適用の合意がない限り、カナダの法が適用されてしまう。

■なぜ外国法を適用するのか

では、なぜ国際的な事件に外国法を適用するのか。国際私法がそう決めているからだというのは答えの半分でしかない。なぜなら、世界には国際私法を持たない国も多いからだ。

国際私法を持たない外国なら、日本からの貿易や貸付にも、自国法を適用してしまうだろう。しかも、すべて自国の裁判所でやる。日本の企業は、そんな国との取引を躊躇するに違いない。100年以上前の日本はそのような途上国であった。

明治初期の日本では、神戸や横浜などに外国人居留地が設けられ、居留地の外国商人が日本の対外貿易を担っていた。しかし、欧米との「不平等条約」によって居留地には日本の「法権」が及ばず、日本人相手の紛争でも、外国法による領事裁判で解決された。

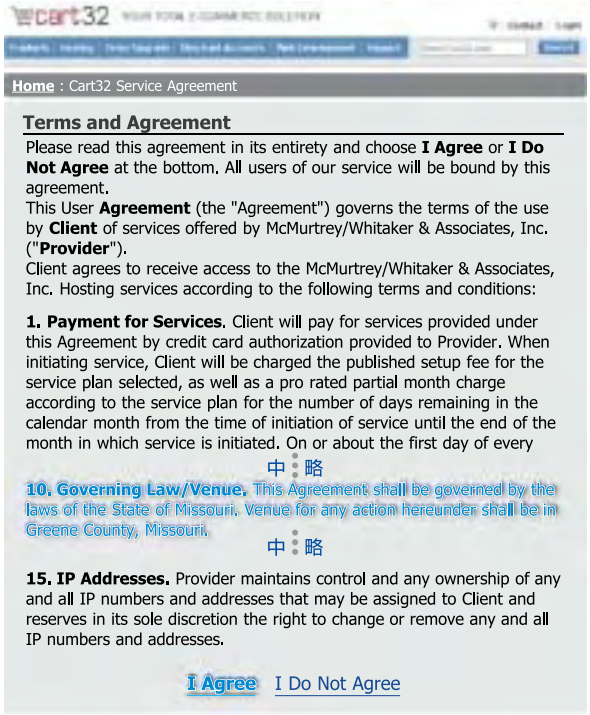
日本は不平等条約の改正を求めたが、欧米列強は応じなかった。なぜなら、居留地がなくなって日本のどこにでも居住し商売できるのはありがたいが、紛争になって御白州（おしらす）で御奉行に裁判されるのは困るからだ。

そこで、欧米並みの法律を立法することが改正の条件とされたのである。国際私法の立法は、日本にとって大きな対外的説得材料であった。国際私法によって、外国人同士が、日本のどこでも、自国法によって結婚したり、子どもに名前をつけたり、相続したりすることが可能となったのである。

■外国法とのリンク

明治の経験から、外国との取引や、国際的な家族生活を円滑に安心して行うためには、国際私法が必要なことがわかる。紛争が経済先進国のどこで問題となっても、その国の国際私法で、どの国の法を適用して解決するかが決まっていれば、同じような結果が得られることが期待できる。企業もリスクの計算がしやすく、国際的経済活動も円滑に行われるようになる。

日本は、国際私法というリンクを通じて世界各国の法につながっている。国際私法は、いわば日本から世界に開かれた窓である。われわれは、国際私法を通じて、外国法との継続的な対話を求められているのである。



cart32

Home : Cart32 Service Agreement

Terms and Agreement

Please read this agreement in its entirety and choose **I Agree** or **I Do Not Agree** at the bottom. All users of our service will be bound by this agreement.
This User **Agreement** (the "Agreement") governs the terms of the use by **Client** of services offered by McMurtrey/Whitaker & Associates, Inc. ("**Provider**").
Client agrees to receive access to the McMurtrey/Whitaker & Associates, Inc. Hosting services according to the following terms and conditions:

1. Payment for Services. Client will pay for services provided under this Agreement by credit card authorization provided to Provider. When initiating service, Client will be charged the published setup fee for the service plan selected, as well as a pro rated partial month charge according to the service plan for the number of days remaining in the calendar month from the time of initiation of service until the end of the month in which service is initiated. On or about the first day of every

中：略

10. Governing Law/Venue. This Agreement shall be governed by the laws of the State of Missouri. Venue for any action hereunder shall be in Greene County, Missouri.

中：略

15. IP Addresses. Provider maintains control and any ownership of any and all IP numbers and addresses that may be assigned to Client and reserves in its sole discretion the right to change or remove any and all IP numbers and addresses.

I Agree　I Do Not Agree

大阪外国語大学キャンパス（箕面市）

大阪大学・大阪外国語大学統合計画が承認

本年３月23日、大阪大学と大阪外国語大学の統合の推進について合意書を締結しましたが、11月30日、文部科学省の大学設置・学校法人審議会において、統合の計画が承認されました。

このことにより、平成19年10月１日、新しい大阪大学が誕生することになります。

（右は改組計画）

学部・学科	入学定員	編入学定員
① 外国語学部外国語学科	580	10
② 法学部国際公共政策学科	80	
③ 大学院文学研究科文化動態論専攻	【修士課程】 19	
④ 大学院人間科学研究科 グローバル人間学専攻	【博士前期課程】 19 【博士後期課程】 8	
⑤ 言語文化研究科言語社会専攻	【博士前期課程】 35 【博士後期課程】 13	

福井俊彦・日本銀行総裁が来学

―金融・保険教育研究センター発足記念式典開催―

11月27日（月）センター発足記念式典と記念講演会が開催されました。

記念講演会では、福井俊彦・日本銀行総裁による「新たな時代を迎えた日本経済と金融」と題した講演が行われました。

講演要旨

日本経済は息の長い拡大局面にあります。デフレスパイラルの危機は去り、地価も主要都市を中心に上昇地点が増えてきているなど、現在の日本経済は、数年前とは見違えるように改善しています。

90年代のバブル崩壊以降、10年以上という長い時間を要しましたが、日本の金融システムも、現在、全体として安定を回復しています。収益の改善等から自己資本も回復しており、90年代末の金融危機以来、累次にわたり注入されてきた公的資金についても、大手行を中心に返済の動きが進んでいます。こうした金融システムの安定化と、資金需要の緩やかな回復により、銀行貸出は昨年以降、増加に転じています。金融界では、貸出手法のイノベーション、新種のリスクへの挑戦、成長市場における営業強化などを通じて、収益力の向上に取り組む動きが目立ってきています。

日本の金融業は、その好業績を背景に、業務の多様化などを通じて、「守り」から「攻め」へと徐々に軸足を移しつつあります。金融機関が「守り」から「攻め」への転換を軌道に乗せていくためには、「攻め」に伴うリスクの増大を、把握しコントロールする経営力が不可欠です。多種多様なリスクをどのように認識、コントロールして、リスク対比リターンの高いビジネスを生み出していくかは、金融機関経営の核心です。

また、80年代と同じようなバブルの再来を防ぐためには、金融イノベーションの進行や市場プレーヤー層の変化などに合わせて、ミスプライシングがあぶり出されやすい透明な市場環境を整備し続けていく努力が要ります。グローバルに展開する企業の付加価値創出力や、それが家計の豊かな資産形成へとつながるメカニズムをしっかりサポートする優れた金融機能が、これからの日本経済には欠かせないのです。

松原謙一、山崎正和両名誉教授が文化功労者に

遺伝子組み換え実験を紹介──松原氏
劇作家・評論家として活躍──山崎氏

松原謙一名誉教授

山崎正和名誉教授

本学の松原謙一名誉教授（細胞生体工学センター）と山崎正和名誉教授（文学部）が平成18年度文化功労者に選ばれ、11月6日、東京・ホテルオークラで顕彰式が行われました。

松原謙一名誉教授は、これまで日本分子生物学会会長等を歴任し、分子生物学者として現在も第一線の研究者として活躍しています。

松原名誉教授は、我が国における分子生物学のパイオニアの一人として、遺伝子組み換え実験を日本に紹介し、日本の生物学及び医科学の分野に新しい研究形態を普及させ、広くDNA研究の推進に貢献しました。また、組み換えDNA実験のガイドラインの作成やヒトゲノムプロジェクトの発足等、分子生物学の発展に大きく貢献したことが評価され、栄えある文化功労者に選ばれました。

本学では、昭和57年4月に新設された細胞工学センターに教授として参画し、昭和62年4月から3期5年間同センター長を務め、平成4年には時限となった同センターを発展的に転換し、新たに細胞生体工学センターを発足させ、平成4年4月から2期4年間同センター長を務めました。

山崎正和名誉教授は、劇作家・評論家として著名であり、その業績は、演劇を中心とした文学・美術・音楽等の東西にわたる芸術論、社会事象や歴史を対象とした文化論・文明論に大別されます。

山崎名誉教授は、戯曲『世阿弥』『二十世紀』などで知られる劇作家であり、『世阿弥』で岸田戯曲賞を受賞し、その地位を不動のものにしました。日本文化についての評論活動でも名高く、戯曲執筆のかたわら、成熟した個人主義に基づいた近代社会を提唱し、その視点から多くの社会評論を発表しました。

『柔らかい個人主義の誕生』で吉野作造賞、『実朝出帆』で芸術祭賞優秀賞、『オイディプス昇天』で読売文学賞戯曲賞等を受賞し、また、中央教育審議会委員ほか政府関係委員等を長く歴任され、大阪大学退官後は、東亜大学学長として大学運営にも取り組みました。こうしたこれまでの多くの業績が評価され、栄えある文化功労者に選ばれました。

本学では、昭和51年5月に文学部教授として赴任して以来、芸能史・演劇学講座を担当され、平成7年3月に退官しました。

平成18年 秋の紫綬褒章受章

松澤佑次名誉教授 ──内科学研究に対する功績

中村敏一教授（医学系研究科）
──生化学研究に対する業績

七大戦 14年ぶり、5回目の総合優勝！

7月初旬から2カ月間にわたり大阪大学主管で開催された、第45回全国七大学総合体育大会（通称、七大戦）で、大阪大学が14年ぶり5回目となる総合優勝しました。

今大会は、最終競技の卓球（男子・女子）まで、北海道大学・大阪大学・名古屋大学の3校が、10点差以内にひしめくデッドヒートが繰り広げられましたが、接戦を制し、見事に大阪大学が栄冠を勝ち取ることができました。

9月27日（水）には、吹田キャンパス、レストラン「匠」で優勝報告会が開催され、宮原秀夫総長から大会の役員並びに競技者に対し慰労の言葉が述べられ、念願の「胴上げ」がクラブ員等の手によって行われました。さらに、早くも来年に向け、連覇を期待する声もあがるなど、次回大会への激励が、会場の至る所で行われ、学業のみならず課外活動を通して、大阪大学のパワーを存分に発揮できた大会でした。

日本医学会総会 24年ぶりに大阪で開催

■第27回日本医学会総会

[学術講演] 平成19年4月6日(金)～8日(日)
会場：大阪国際会議場
リーガロイヤルホテル
ホテルニューオータニ大阪

[学術展示] 4月5日(木)～8日(日)
会場：大阪国際会議場

[企画展示] 3月31日(土)～4月8日(日)
会場：大阪城ホール
大阪ビジネスパーク(OBP)ほか。

問い合わせ 第27回日本医学会総会事務局
(TEL 06-6875-8346)

工学部・基礎工学部が最先端の研究内容をアピール

工学部と基礎工学部は、受験生や保護者に対し、それぞれの魅力をアピールするために日経BPムック「変革する大学シリーズ」を刊行しました。

理工系離れと言われている現在、大阪大学での最先端の研究や教育内容の紹介、教員の紹介など、受験生にも読みやすい構成で、両学部の特色を前面にアピールしています。また女性研究者も積極的に自身の研究内容等の情報発信を行っています。

書籍は、大型書店等でも一般に発売されています。1143円(税別)。

■小野高裕助教授「European College of Gerodontology GABA Research Award」受賞

歯学研究科の小野高裕助教授が、ヨーロッパ高齢者歯科学会のAnnual Meeting European College of Gerodontology GABA Research Awardを受賞しました。

■松澤佑次名誉教授　国際肥満学会最高賞「ヴィレンドルフ賞」受賞

松澤佑次名誉教授は、肥満、生活習慣病に関して最も重要な研究業績を挙げた研究者に贈られる「ヴィレンドルフ賞」を本年9月にシドニーで開催された第10回国際肥満学会で受賞しました。ヴィレンドルフ賞は、オーストリアの石器時代の遺跡から発見された肥満女性の石像「ヴィレンドルフのヴィーナス」に因んだもので、1980年に創設され、松澤名誉教授は世界では7人目、わが国では初めての受賞です。

■西尾章治郎教授、原隆浩助教授、日本データベース学会「論文賞」受賞

情報科学研究科の西尾章治郎研究科長・教授と原隆浩助教授が、日本データベース学会の「論文賞」を受賞しました。

■福永伸哉教授「第19回濱田青陵賞」受賞

文学研究科の福永伸哉教授が、これからの考古学や関連分野を担う優れた研究者に贈られる「第19回濱田青陵賞」を受賞しました。

●シンポジウム等

■シンポジウム『科学技術倫理と法曹教育～新しいあり方の模索～』

平成18年12月16日(土)、大阪国際会議場(グランキューブ大阪)。問い合わせ先＝高等司法研究科先端的法曹養成センター(TEL 06-6850-6944)

■Thailand-Japan Joint Forum on Infectious Diseases

平成19年1月29日(月)～31日(水)、タイ国立予防衛生研究所(タイ)。問い合わせ先＝微生物病研究所・生田和良教授(TEL 06-6879-8307)

■第13回エレクトロニクスにおけるマイクロ接合・実装シンポジウム

2月1日(木)～2日(金)、パシフィコ横浜会議センター。問い合わせ先＝工学研究科・藤本公三教授(TEL 06-6879-7550)

■第30回日本脳神経CI学会総会

2月2日(金)～3日(土)、大阪国際会議場(グランキューブ大阪)。問い合わせ先＝医学系研究科・吉峰俊樹教授(TEL 06-6879-3652)

■第6回大阪大学国際高分子シンポジウム(OUMS'07)

2月19日(月)～21日(水)、医学部銀杏会館。問い合わせ先＝理学研究科・佐藤尚弘教授(TEL 06-6850-5461)

■第5回日本骨相続症研究会学術大会

3月4日(日)、千里ライフサイエンスセンター。問い合わせ先＝歯学研究科生化学教室(TEL 06-6879-2887)

■魅力ある大学院教育イニシアティブ「統合デザイン力教育プログラム」シンポジウム

3月6日(火)、医学部銀杏会館。問い合わせ先＝工学研究科機械工学専攻事務室(TEL 06-6879-7324)

■第10回コンピュテーショナル・マテリアルズ・デザイン(CMD)ワークショップ

3月6日(火)～10日(土)、国際高等研究所、日本原子力研究開発機構関西光科学研究所。問い合わせ先＝CMDワークショップ実行委員会
E-mail：cmd@dyn.ap.eng.osaka-u.ac.jp

■3大学3研究所連携プロジェクト公開討論会(第1回)「金属ガラス・無機材料の新接合技術と先進材料の創製」

3月9日(金)、千里ライフサイエンスセンター。問い合わせ先＝接合科学研究所・黒田敏雄特任教授(TEL 06-6879-4367)

■第80回日本細菌学会総会

3月26日(月)～28日(水)、アジア太平洋トレードセンター(大阪市)。問い合わせ先＝第80回日本細菌学会総会事務局「微生物病研究所細菌感染分野内」(TEL 06-6879-8276)

■第76回日本寄生虫学会大会

3月29日(木)～30日(金)、コンベンションセンター。問い合わせ先＝微生物病研究所・堀井俊宏教授(TEL 06-6879-8280)

☆蛋白質研究所セミナー

「ペプチドミクスの最前線：新規活性ペプチド、マーカーペプチドの検索」

1月9日(火)～10日(水)、蛋白質研究所。問い合わせ先＝蛋白質研究所・高尾敏文教授(TEL 06-6879-4312)

「生体超分子構造解析ビームラインワークショップ」

3月1日(木)～3日(土)、蛋白質研究所。問い合わせ先＝蛋白質研究所・中川敦史教授(TEL 06-6879-4313)

Handai NEWS Letter No.34 2006・12・Winter
[阪大ニューズレター]
●発行日・平成18年12月1日 ●発行・大阪大学 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1・TEL 06-6877-5111
●編集・大阪大学総務部評価・広報課 ●編集協力・毎日新聞総合事業局

大阪大学第3の海外拠点
「バンコク教育研究センター」で開所式

東南アジアのハブの役割を担う

タマサート大学との大学間学術交流協定調印式。宮原秀夫総長（右）と、スラポン・ニティグライポット タマサート大学学長（左）

開所式で挨拶する宮原秀夫総長

北米拠点のサンフランシスコ、欧州拠点のオランダ・グローニンゲンに続く3番目の海外拠点である「大阪大学バンコク教育研究センター」の開所式が10月16日、タイ国・バンコクでありました。同センターは、学生・研究者の交流、共同研究を推進するとともに、バンコクという地理的な条件を生かし、東南アジア全体のハブの役割を担うことが期待されています。

●長いタイ国との交流の歴史

大阪大学には、タイ国との共同教育・研究の長い歴史があります。なかでもユネスコ微生物学国際大学院研修講座は、1973年から30年間続き、現在ではユネスコ・バイオテクノロジー国際大学院研修講座に引き継がれています。439人にのぼる卒業生は、東南アジア・東アジア全域におけるこの分野の中核研究者として活躍しています。感染症の分野でも注目すべき共同研究を行っています。1962年のタイ・ウイルス研究センター立ち上げ協力に始まり、このほどタイ国の国立予防衛生研究所の中に、タイ感染症共同研究センターを設置しました。バンコク教育研究センターは、こうした共同研究の支援も行います。

●開所式には180人が出席

開所式はチャオプラヤー河を望むシャングリラ・ホテルで行われました。宮原秀夫総長のスピーチに続き、小林秀明・駐タイ王国特命全権大使、本学と交流協定を持つ5大学の学長、保健省医科学局長からの祝辞後、木下タロウ・微生物病研究所長と荻原哲・理学研究科教授の記念講演が行われました。約180人の出席者は、熱心にスピーチと講演に聴き入っていました。

開所式の翌日に行われたセミナーでは、文系・理工系・医薬系・日本語など6つの分科会に分かれ、発表者には日本側から21人、タイ側から15人、さらに昨年大阪大学フォーラムの行われたベトナムからも1人が参加しました。

●新たに3大学と学術交流協定

同17日、総長一行は、モンクット王トンブリ工科大学、タマサート大学、カセサート大学の3大学に赴き、大学間学術交流協定を結びました。各大学とも歓待の中、調印式が行われ、本学との交流に熱い期待を持っていることが感じられました。これまでタイ国とは、チュランロンコン大学、マヒドン大学、保健省医科学局と大学間学術交流協定を結んでいますが、センター開設を機にさらに交流の輪が広がりました。

バンコク教育研究センターが入る
Serm-Mit Tower（左手前低層棟10階）

●タイ国同窓会が発足

また、「Thai Osaka University Alumni Club」が発足しました。帰国留学生の多いタイ国では、現地在住の日本人同窓生も含め、これまで何回か集まりがありましたが、このたび正式に同窓会として発足したものです。会長には大阪大学工学部出身のイチチャイ・アルンシーセンチャイ氏（モンクット王ラックラバン工科大学）、事務局長には同じく工学部出身のポンチャイ・ヨンワッタナスントーン氏（Sanyo Semiconductor Thailand）が選ばれました。開所式の夜にあったレセプションでは、セミナー参加者も含め、総勢190人の出席があり、再会を喜び旧交を温める同窓生の姿が数多く見られました。タイ国同窓会は、昨年結成された北米同窓会に続くもので、今後もこのような同窓会ネットワークを世界に広げていきたいと考えています。

（大阪大学理事・国際交流推進本部長　橋本日出男）

◀チュラロンコン大学にて
クンジンスチャダー・キラナン学長
（正面右）と歓談

タイ国同窓会メンバーを囲んで▶

NEXT ISSUE・No.35
[阪大ニューズレター]次号（春号）の特集予告
◉次回は、基礎科学と最先端科学をテーマにした特集を予定しています。

●大阪大学または阪大ニューズレターへのご意見、お問い合わせがありましたら、Eメールで受け付けております。E-Mail:NEWSLETTER@star.jim.osaka-u.ac.jp

◎阪大ニューズレターは、新聞古紙100%の再生紙を使用しています。